

有明海水産資源回復技術確立事業*

アゲマキ増養殖技術開発試験（アゲマキ移植による養殖技術開発）

土井大生・神崎博幸・川名拓里・大渡功晟

当センターでは、有明海の重要な水産資源の一つであるアゲマキの資源回復を目的として、1996年度から母貝集団の創出に向け、種苗生産及び放流技術の開発に取り組み、殻長8mmサイズの稚貝を200万個規模で生産することで、母貝集団を創出するための放流技術の開発に成功した¹⁻⁶⁾。また、生産技術の進展に伴い、殻長2mmの稚貝でも数百万個の単位で一定程度母貝集団を創出することが可能となった。

かつて、有明海佐賀県海域で行われていたアゲマキの地撒き養殖は、春先に沿岸域で殻長2～3cm程度の稚貝を採取し、密度調整や養殖場の耕耘等を行い移植していた。この従来から行われていた養殖スケジュールを活用し、人工種苗の移植による養殖が可能か検討したので、その結果を報告する。

方 法

2024年11月に鹿島市浜地先の地盤高4.0mの干潟に殻長2mmサイズで放流した。その後、2025年6月までに平均殻長20mmまで成長したアゲマキ稚貝を取り上げて移植養殖試験に供した。浜地先へは、2025年5月2日に取上げ、地盤高2mへ密度をそれぞれ600個/m²と1,200個/m²に調整し、野菜収穫カゴ（写真1）に収容した。東与賀地先へは、2025年6月2日に取上げ、地盤高3.3m地点へ密度を600個/m²に調整し、オレンジカゴ（アロン化成野菜収穫カゴ：写真2）に収容した。両地先ともに、上部にはネットロン製の蓋を被せて強固な食害対策を施した。

調査は、移植後1～3か月に1回の頻度で行った。生残状況については、オレンジカゴからアゲマキを全て取り出して計数及び殻長の測定を行い、その後計数結果から生残率を算出した。

結 果

浜地先の生残率は、7月時点で、密度600個/m²で15%、密度1,200個/m²で25%であり、生残率が極端に低下した。平均殻長は、11月時点で、密度600個/m²で54.4mm、密度1,200個/m²で56.5mmまで成長した。

東与賀地先の生残率は、8月調査時点で、93.7%であっ

たが、11月時点では、29.1%まで低下した。平均殻長は11月時点で、54.9mmまで成長した。

浜地先では、今年度の移植養殖試験に野菜収穫カゴを使用した。目合対角線が1.8cmと大きいため、収容後の種苗が抜け、7月時点で生残率が大幅に低下した可能性が考えられる。

また令和6年度の移植養殖試験でも、10～11月までに生残率が50%以下まで低下しており、令和7年度も同様に、浜地先と東与賀地先で11月までに生残率が30%以下まで低下した。



写真1 野菜収穫カゴ



写真2 養殖試験の様子

文 献

- 1) 大隈 齊・江口泰造・山口忠則・川原逸朗・伊藤史郎 (2003) : 有明海におけるアゲマキ人工種苗の成長と成熟, 佐有水振セ研報. (18), 21-24.
- 2) 津城啓子・大隈 齊・藤崎 博・有吉敏和 (2009) : 有明海におけるアゲマキ人工種苗の成長と成熟-II, 佐有水振セ研報. (24), 1-4.
- 3) 津城啓子・佃 政則・大隈 齊・古賀秀昭 (2013) : アゲマキ放流稚貝の生残・成長と底質 (物理環境) との関係, 佐有水振セ研報. (26), 93-100.
- 4) 佃 政則・神崎博幸・福元 亨・梅田智樹・荒巻 裕・伊藤史郎 (2017) : 被覆網による放流後のアゲマキ稚貝の散逸対策, 佐有水振セ研報. (28) . 43-45
- 5) 佃 政則・野間昌平・神崎博幸・福元 亨・野田進治・梅田智樹 (2019) : 被覆網を用いたアゲマキ放流条件の再検討, 佐有水振セ研報. (29) . 5-9
- 6) 野間昌平・大庭元気・重久剛佑・野田進治・佃 政則 (2021) : 被覆網を用いたアゲマキ放流手法の高度化, 佐有水振セ研報. (30), 26-30.

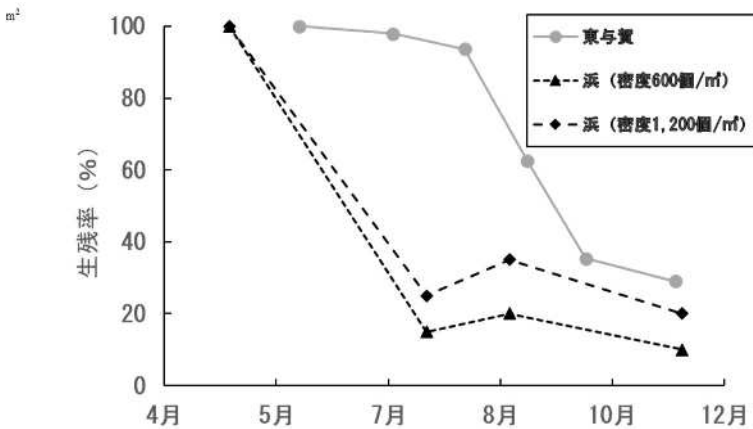


図1 移植後の養殖区画の生残率の推移

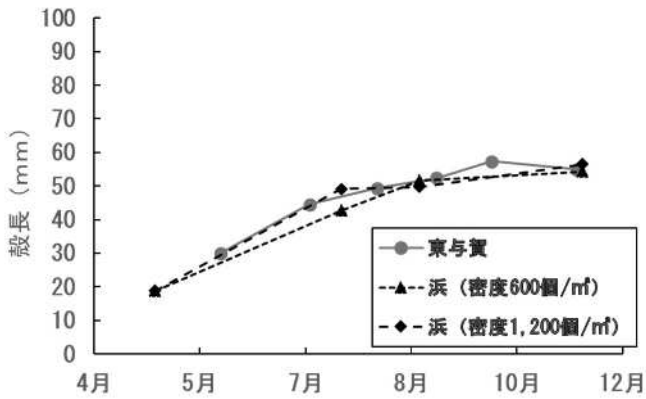


図2 移植後の養殖区画の殻長の推移